

チンパンジーをチンパンジーらしく育てる

福守 朗

(鹿児島市平川動物公園)

IUCN（世界自然保護連合）が定めるレッドリストにおいて、チンパンジーは絶滅危惧種に指定されている。森林伐採などの自然環境破壊や密猟の影響により、野生のチンパンジーは急速に生息数を減らしている。そのため、動物園で繁殖に取り組むことの意義は大きい。しかしながら高度な社会性を有し、群れの中で様々なことを学びながら成長するチンパンジーを飼育下において繁殖させ、「チンパンジーらしく」育てるのは容易ではない。平川動物公園では1972年の開園時からチンパンジーを飼育してきたが、繁殖には至らなかった。幼いチンパンジーだけで飼育を開始しても、成長の過程で性行動を含む正常な行動を学習する機会がなければ、成熟後に適切な行動を発現できなかったためと考えられる。また、2005年以降はオスのみの単性飼育が続き、繁殖の機会がなかった。

施設の再整備により、2015年からは群れでチンパンジーを飼育できる施設と体制が整った。若齢のメスを複数導入し、新たな群れづくりを試みた。その結果、2017年4月に前身の鴨池動物園時代も通じて初めてのチンパンジーの繁殖に成功した。出産後も母親による育児が順調に行われている。これは、出産した個体は幼少時に他個体の出産および育児を学習する機会に恵まれていたからであろう。その後も2020年2月と12月に別の個体も含めて繁殖に成功している。

もし、出産しても母親が育児を適切にしない場合はどのようなべきであろうか。初産の場合は最初から適切な育児行動を示すことは少ない。母親の試行錯誤を見守ると同時に、適切な育児行動を促すことが肝要である。人が代わって育てる場合も、哺乳を行うだけでなく早い段階から群れのメンバーとの見合いを始め、互いの存在を認識させ、飼育者に対する依存心が強くなり過ぎないように対応が必要である。近年、このような取り組みが他の飼育施設で試みられ、群れへの再導入に成功した事例が複数ある。

幼少時から人が育てたチンパンジーをエンターテイメントに用いる事例が一部で見られるが、「チンパンジーらしく」育っているとは思えないし、動物福祉に反する。動物本来のくらしに配慮した飼育のあり方が求められる。

○鹿児島市立科学館サイエンストーク

令和3年2月27日(土)

鹿児島市立科学館